メートルほど離れて止った。そうするうちに、船からは、手紙などの荷物を積みこんだ二隻のボートがおろされ、船員がこぎはじめた。そして、向うの船で荷物の交換をしてもどってきた。甲板の上から、かたずをのんでこのようすを、じっと眺めていた健次郎は感動した。

「ヨーロッパやアメリカの学問は、いったいどのくらい進んでいるのだろうか、日本のおくれているのはこれだ。日本の政治や経済を発展させるには、まず、科学をさかんにしなければならない。」

と、強く心に感じた。この体験は、健次郎の将来を決定したできごとだった。

自然科学を学ぶ

「よし、私は、科学の勉強をして日本のために尽くそう。」